

「日本放射光学会創立20周年記念シンポジウム・式典」報告 1

日本放射光学会 会長 雨宮慶幸 (東大・新領域)

第22回年会・放射光科学合同シンポジウム(1月9日～12日)、及び、学会創立20周年記念事業(シンポジウム・式典、1月10日)が東京大学本郷キャンパスで盛況のうちに開催されました。詳細は繁政渉外幹事の報告記事をご覧ください。

日本放射光学会の今後の益々の発展のために、会員の皆様と共に尽力したいと決意を新たにしています。

式典での会長挨拶をもって報告とさせていただきます。

式典での会長挨拶

本日は日本放射光学会創立20周年を記念する本式典にご参加頂きまして、ありがとうございます。

来賓の皆様をはじめ、本式典に先立ち開催された記念シンポジウム「夢の光が未来を拓く」に参加された多く市民、そして高校生の皆さんにも、本学会を代表して、お礼申し上げます。

記念シンポジウムに参加されて、放射光を用いてどのような研究が行われているのか、また、どのような成果が得られているのか、の一端を知って頂けたのではないかと、思っております。

受付で配布されたパンフレットに「短い波長の明るい光が重要なんだ！」と記されています。この光が正に放射光であり、この光は光の速度に加速された電子から生み出されます。

日本放射光学会では、これまで、その放射光を作ったり、加工したり、検出したりする技術の開発研究を進めてきました。更に、放射光を用いる幅広い基礎研究と応用研究を開拓し推進してきました。

放射光の応用分野は大変に広く、物質科学、生命科学、医学、情報科学、ナノテク、エネルギー、環境分野に跨ります。さらに、先程のシンポジウムの講演にもありましたように安心・安全な社会作りの為にも貢献しています。このように、放射光科学は多くの研究分野を横断する学際的な性格を有していることがその特徴の一つといえます。

また、パンフレットに記述されているように、世界には数多くの放射光施設があり、お互いにあるときは競争、またあるときは協力しながら放射光科学を推進しています。このように放射光科学は強い国際性を有していることがも

う一つの特徴です。この式典には、海外からスタンフォード大学の Winick 教授、台湾放射光施設の Ken-Liang 教授にご出席頂いております。

本学会が、創立20周年を迎えたこの機会に、放射光科学に対しこれまで多大なご支援を頂き、また、今後ご支援頂きます文部科学省の方にお礼申し上げます。また、本日の記念式典にご臨席頂きました東京大学の小宮山総長には、放射光科学に対するご理解とご支援を頂いていますことを心から感謝申し上げます。東京大学の複数の研究科を横断する組織である放射光連携研究機構を総長室総括委員会の元に設置して頂き、SPring-8の長直線部に世界最高の性能を有する東大アウトステーションを建設するためのご支援を頂きました。

また、本日ご臨席頂いております、関連する学会の会長の皆様にお礼を申し上げます。先に述べましたように、放射光科学は学際的な性格を有しており、放射光科学の裾野の広がり、関連する学会に所属する研究者の方々との共同研究に因るものです。

また、放射光科学および本学会の発展の為にこれまでご協力頂きましたご来賓の企業の方々にお礼申し上げます。

本学会は創立20周年を一つの節目として、今後更に放射光科学のピークを高めるべく貢献してゆきたいと決意を新たにしています。

今まで以上に、放射光研究施設間のハブとしての役割を強化し、研究資源の最大限の活用に向けて放射光科学のピークを更に高めると共に、他学会との連携を深めて、放射光科学の裾野を更に広げてゆきたいと思っております。

また、産業界との連携を更に深めて、研究成果を広く社会に還元し、そして、その内容を広く社会に分かり易く発信して、ここに参加された多くの市民の皆様との相互交流も深めて行きたいと考えています。

最後になりますが、これまで本学会を牽引して頂きましたここにご参席の本学会の歴代の会長の方々には、これまでのご尽力にお礼を申し上げますと共に、今後ご指導を賜りたいと存じます。よろしく申し上げます。

本式典にご臨席の皆様の、放射光科学、および本学会に対する益々のご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。会長挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。